

統合実践実習の実践報告と今後の課題

斎藤まさ子 袖山悦子 広井貴子 佐藤初美 古澤弘美
長岡崇徳大学

A Practical Report on Integrated Nursing Practice and Future Issues

Masako Saito, Etsuko Sodeyama, Takako Hiroi, Hatsumi Sato, Hiromi Hurusawa
Nagaoka Sutoku University

要旨:本学は、2019年度に開学した新設大学で、統合実践実習は初回であった。COVID-19による感染拡大の中、実習病院の協力により学生全員が臨地で実習することができた。実習の概要、学生が書いた「実習での学び」と「今後の自己の課題」のレポートの分析結果を紹介した。レポートの活用は、学生に倫理的配慮を説明し38名全員の協力を得た。質的記述的に分析した結果、実習での学びは、カテゴリー【優先順位を考える際の実践的な学び】、【専門的知識や技術に基づいた対象理解】、【チームナーシングの実践的な学び】、【多職種チームの専門性を活かしたケアの提供】、【多職種連携における看護の役割】、【看護管理者の役割】であり、今後の自己の課題は、【状態を的確に把握する力】、【地域での生活を見据えた看護】、【対象理解と個別性を尊重した看護】、【チームメンバーとしての力】であった。実習目的や目標は概ね達成できたものとする。

今後は、訪問看護ステーションや福祉施設など、様々な場での様々な形の看護を前提とした教育内容を組み込むこと、実習ごとの自己の課題の意識化と積み重ねが課題としてあげられた。

キーワード: 統合実践実習, 実践報告, 学生のレポート, 今後の課題

Keywords: integrated nursing practice, practical report, student reports, future issues

I. はじめに

統合実践実習は、これまでに学んだ知識・技術・態度を統合し、自己の学習課題を達成するために、学生が教員指導のもとで実習計画を立案して臨む実習である。本学は2019年度に開学し、2022年度に完成年度を迎える。実習は、中国武漢で発生した新型コロナウイルス感染症(以下、COVID-19とする)拡大の影響を受けたものの、実習委員会によるCOVID-19感染症対策に基づき実習が行われ、中止することなく実施することができた。

本学が、初めて実施した統合実践実習について、実施の概要と学生の学びのレポートをまとめることで見えてきた今後の課題について報告する。

II. 本学における統合実習の位置づけ

当該実習は、表1の通り、看護の基本、生涯発達と看護、地域社会と看護において修得した知識・技術・態度を統合する4年次生の必修科目であり、2単位90時間の実習である。

III. 統合実践実習の目的・目標

実習目的と目標は、次の通りである。

1. 実習目的

これまでに学んだ知識・技術・態度を統合し、自己の課題と目標を明確にしたうえで、保健医療福祉チームの一員として看護の実際を学び、自らの看護実践能力の向上にむけて学び続ける姿勢や課題探求能力の基盤を養う。

2. 実習目標

1) 自己の学習課題に焦点をあて、実習目標を明らかにした上で実習計画を立案することができる。

表1 看護師課程の実習科目

看護の基本	生涯発達と看護	地域社会と看護	看護の統合と実践
看護の意義と保健・医療・福祉における看護の役割を理解し、日常生活の援助及び診療における看護に関する基礎的な知識と技術を修得させるとともに、看護を適切に行う能力と態度を育成する。	生涯発達の視点から、発達対象別の看護の特徴を学ぶ。それぞれの対象の特徴を理解し、対象者の価値観や生活を尊重した具体的な看護技術について、科学的根拠をもって実践し、対象者のいのち・くらし・尊厳を守り支える看護を学ぶ。	地域で療養やリハビリテーションをしている人の生活を支える専門職との連携や地域住民を含めた多職種連携の方法、社会資源の活用方法を学ぶ。	「看護の基本」 「生涯発達と看護」 「地域社会と看護」 において修得した知識・技術・態度を応用し発展させる。
基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ	成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 老年看護学実習Ⅰ・Ⅱ 小児看護学実習Ⅰ 母性看護学実習 精神看護学実習	在宅看護学実習	統合実践実習

- (1) 実習場所の特殊性に応じて、自己の課題に合った実習目標を挙げることができる。
- (2) 自己の実習目標に沿った実習計画の立案ができる。
- 2) 複数の患者を受け持ち、優先順位を考えて患者の個別性に合わせた看護援助が実践できる。
 - (1) 複数の患者を受け持つあるいは複数課題の優先順位を考えることができる。
 - (2) 対象に合わせた看護援助の立案ができ、計画に沿って実践できる。
- 3) 専門的知識と確かな技術に基づいた安全な看護を提供でき、提供した看護について適正に評価できる。
 - (1) 対象の変化に合わせ安全な看護援助に向けて、計画を追加・修正ができる。
 - (2) 日々の看護援助を科学的根拠に基づき振り返ることができる。
- 4) チームアプローチを含む看護活動体験を通して、医療チームに関わる人びとと協働することの意義を説明できる。
 - (1) 看護職のチームアプローチの体験において自己の考えを述べることができる。
 - (2) 多職種チームアプローチの意義と看護の役割を述べることができる。
- 5) 実習を通して、これまでの学習体験を統合し、自らの学習課題に対する学びと今後の課題を見出し、表現できる。

- (1) 自らの学習課題に対する学びと今後の課題を明らかにすることができる。

IV. 実習の概要と実際

1. 実習時期

4年次前期に配当されており、日程は2022年7月4日(月)から2週間の実習であった。

2. 実習施設の決定

2019年の大学開設時に、近隣の病院や訪問看護ステーションなど16施設から本実習の受け入れの了解を得ていた。しかし、学生の人数が80名定員のところ38名と少数であったことや、学生を対象とした希望調査などから、実際に実習を依頼した施設は病院7か所であった。病棟数にすると14病棟で、1病棟に学生2～3人が配置された。

3. 実習までのプロセス

2022年度に入ると、実習先に配置された担当教員が各病院に行き、実習要項を基に実習の目的・目標、内容、指導依頼内容について詳細に説明した。初回であるため、実習指導者と教員との役割のすみわけ等、具体的な動きについて丁寧にすり合わせを行った。

一方、学生も同時期に、実習目標1)「自己の学習課題に焦点をあて、実習目標を明らかにした上で実習計画を立案する」に取り組んだ。

1年次の基礎看護学実習から3年次の領域実習において積み残した「自己の学習課題」を明確にして、それを盛り込んだ実習目標を達成するための計画立案を、それぞれの病院病棟を担当する教員と相談しながら進めた。この際、「自己の学習課題」を見出すことに苦勞する学生がいることが、教員間の話題に上った。各担当教員は、それぞれの病棟の特性を活かしつつ、実

習目標達成に向けて実習スケジュールをどのようにするかを実習指導者と話し合い、それを持ち帰って学生に伝えた。それを元に、学生は自らの実習計画を完成させ、実習に臨んだ。表2は、統合実践実習計画書の例である。

なお、COVID-19の影響で、臨地での実習ができなくなる場合も想定されたため、学内実習における実習計画や具体的な準備も行った。

表2 統合実践実習計画書

学籍番号 11111	氏名 A	担当教員 C先生
実習場所	H病院J病棟	

	実習日	実習内容
1週目	7/4 (月)	目標：①オリエンテーションにより看護統合実習の目的目標を理解できる。 ②明日からの実習に備えて事前準備ができる。 ③自己の課題（意見交換の場で自分の意見が言えない）に向けて、オリエンテーションの場で焦らないで落ち着いて発言ができる。
	7/5 (火)	目標：①病棟の特徴をつかむ。②複数の患者のケアを行うことができる。 ・病棟オリエンテーションに参加し、質問がある場合は焦らないで落ち着いて発言する。 ・実習指導者にシャドウイングして、2名の患者のケアを行う。 ・意見交換の場や学生カンファレンスで、落ち着いて発言する。
	7/6 (水)	目標：2人の患者を受け持ち、優先順位を考えた安全な看護援助ができる。 ・実習指導者に指導を受けながら優先順位を考えた安全な看護援助をする。 ・学生カンファレンスで落ち着いて発言する。
	7/7 (木)	目標：2人の患者を受け持ち、優先順位を考えた安全な看護援助ができる。 ・実習指導者に指導を受けながら優先順位を考えた安全な看護援助をする。 ・学生カンファレンスで自分から落ち着いて発言する。
	7/8 (金)	目標：1週目の学びを振り返り発表することができる。 ・学びをグループメンバーや担当教員と意見交換する。その際、落ち着いて言える。 ・2週目に向けて事前学習ができる。
2週目	7/11 (月)	目標：①2人の患者を受け持ち、優先順位を考えた安全な看護援助ができる。 ②リーダーシップとメンバーシップについて理解できる。 ・実習指導者に指導を受けながら優先順位を考えた安全な看護援助をする。 ・リーダーに付き、リーダーシップとメンバーシップを学ぶ。 ・学生カンファレンスで落ち着いて発言する。
	7/12 (火)	目標：①2人の患者を受け持ち、優先順位を考えた安全な看護援助ができる。 ②看護管理の実際を理解できる。 ・実習指導者に指導を受けながら優先順位を考えた安全な看護援助をする。 ・看護管理者（病棟師長や看護部長）に付き、看護管理の実際を学ぶ。 ・病棟カンファレンスで受持ち患者さんについて焦らず落ち着いて言える。
	7/13 (水)	目標：①2人の患者を受け持ち、優先順位を考えた安全な看護援助ができる。 ②多職種チームアプローチについて実際に体験できる。 ・多職種カンファレンスで個々の専門性と協働について知る。 ・病棟での最終カンファレンスで2週間の学びを緊張しないでと発表できる。
	7/14 (木)	目標：①2週目の学びを振り返り意見交換できる。②全体の振り返りとまとめができる。 ・グループメンバーや教員と緊張しないで意見交換できる。焦らない。 ・全体発表会に向けた準備をする。
	7/15 (金)	目標：①発表会で発表することができる。②他グループと学びを共有することができる。 ・積極的に発表会に参加し、質問をする。

4. 実習の実際

学生は、全員が2週間実習病院で実習することができた。実習の週間予定表は表3のとおりである。病院実習は6日間54時間、学内実習が36時間であった。1週目の月曜日は、直前オリエンテーションや学生の事前学習の時間とした。火、水、木曜日の病院での実習は、学生が2名の患者を受持ち、立案した計画に沿って行われた。金曜日は学内実習で、1週目の学びをグループメンバー同士発表し合い、教員もまじえて意見交換することで学びの深化を図るとともに、2週目に活かすためのまとめの時間とした。2週目は、月、火、水曜日は病院実習で、木曜日は1週目と同様に2週目の学びをグループメンバー同士発表し合い、まとめを行った。また、翌日の全体発表会の準備の時間とした。実習最終日である金曜日は、午前中に全体発表会を実施した。目的は、4年生全員が発表し合うことで学びの共有を図るとともに、看護を探究し続ける姿勢を養うことであった。午後は実習全体の振り返りを行い、実習での学びと自己の今後の課題についてレポート作成の時間とした。

表3 週間予定表

週	曜日	実習場所	主な内容
1週	月	学内	オリエンテーション・事前学習
	火	臨地実習	実習計画に基づき実施 (看護職・多職種カンファレンスに参加する)
	水	臨地実習	
	木	臨地実習	
	金	学内	グループメンバー・教員と意見交換し、実習での学びを「実習の振り返り」用紙にまとめ、2週目の実習に活かす。
2週	月	臨地実習	実習計画に基づき実施
	火	臨地実習	
	水	臨地実習	実習計画に基づき実施・実習施設で最終カンファレンス
	木	学内	・グループメンバー・教員と意見交換し、2週目の実習での学びを「実習の振り返り」用紙にまとめる。 ・全体発表に向けた準備をする。
	金	学内	AM 全体発表会 PM 実習全体の振り返りとまとめ(レポート、評価表) 15:00～評価面接

V. 統合実践実習での学びと自己の課題

分析対象は、実習後に学生が提出した「実習での学び」と「今後の自己の課題」について書かれたレポート内容である。倫理的配慮として、レポート提出後に、学生全員が毎日確認することを義務付けている大学専用のサイトに、説明文と協力依頼に承諾するか否かの意思を確認する内容を掲載した。内容は、実践報告の趣旨を説明し、個人情報の保護、匿名とし個人が特定されないようにすること、協力しなくても不利益は被らないこと、結果は大学の紀要に投稿することであった。その結果、38名全員の協力の意思を確認した。

1. レポート内容の分析方法

レポートに記されている38名分の「実習での学び」と「今後の自己の課題」について、それぞれ分けて分析した。書かれている内容ごとにコード化し、コードの意味内容の類似性に基づいてサブカテゴリーを作成し、その意味の関連と抽象度の視点からカテゴリーを形成した。これらのカテゴリー、サブカテゴリー、代表的なコードを表4と5に示した。

「実習での学び」と今後の「自己の課題」について、概要を述べる。カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを< >で表した。

2. 実習での学び

分析の結果、139のコードが見出され、21のサブカテゴリー、6つのカテゴリーが抽出された。カテゴリーは、【優先順位を考える際の実践的な学び】、【専門的知識や技術に基づいた対象理解】、【チームナーシングの実践的な学び】、【多職種チームの専門性を活かしたケアの提供】、【多職種連携における看護の役割】、【看護管理者の役割】であった。次に、カテゴリーごとに内容を紹介する。

1) 【優先順位を考える際の実践的な学び】

このカテゴリーは、「実習での学び」の中で最もコード数が多かった。6つのサブカテゴリーがあり、<緊急性や重症度など生命の安全を最優先にした対応>、<その日の予定や指定されたスケジュールの優先>、<直近の情報や直接的な観察から状態把握>、<効率的な時間管理の必要性>、<状況変化に応じた臨機応変な判断>、<判断の根拠の明確化>で構成されていた。学生は、優先順位を考える場合に、生命の安全を最優先にするものの、その日の対象者の点滴や処置、検査などの予定や、入浴日などの病棟の予定も優先事項となることを学んでいた。また、状態を把握するには直近の状態把握が必要であり、カルテからの情報収集だけでなく、直接対象者に会って状態を把握することや、状況の変化に応じた臨機応変な判断の必要性を学んでいた。

2) 【専門的知識や技術に基づいた対象理解】

このカテゴリーは、<対象理解と個別性への配慮>、<思いを読み取れるコミュニケーション技術の重要性>、<言動の背景にある意味を考える>で構成されていた。学生は、対象理解と個別性にあった看護実践の大切さ、ことばで表現できない人とのコミュニケーション技術、対象者の言動から背景にある意味を読み取る

技術など、専門的知識や技術を用いた対象理解の必要性について学んでいた。

3) 【チームナーシングの実践的な学び】

このカテゴリーは、<ケアの実施に必要なスタッフ同士の協力体制>、<スタッフ間の情報共有によるケアの統一化>、<チームとして機能するための責任感と相互の補完>、<リーダーが行う全体の状況把握と業務の円滑な推進>の4つのサブカテゴリーで構成されていた。学生は、看護師個々の責任感を基盤とした、チーム内での情報共有やメンバー同士の協力体制などのメンバーシップについて学んでいた。また、病棟全体の状況を把握し業務を円滑に進めるために行動するリーダーの役割について学んでいた。

4) 【多職種チームの専門性を活かしたケアの提供】

このカテゴリーは、4つのサブカテゴリー、<共通の目標に向かって包括的でよりよいケアの提供>、<専門的・多角的な対象理解で希望に沿う生活の実現>、<地域との連携で目標の共有とケアの統一化>、<療養生活の彩りを目指す連携>で構成されていた。代表的なコードにみられるように、学生は、多職種カンファレンスに関連した学びの記述が多く、それぞれの専門性を活かし、チームで包括的なケアの実現に向けて共通認識できる場になっていることが記されていた。また、多職種協働によって、ケアの質の向上や対象者の希望に沿える地域生活の実現、地域の専門職との連携の姿などを学んでいた。

5) 【多職種連携における看護の役割】

このカテゴリーは、<対象者の疾病や生活に関する情報提供>、<連携・協働するための仲介役>という2つのサブカテゴリーで構成されていた。学生は、多職種チームの中における看護師の役割として、看護の対象者の疾病に関することや、思いや意向を情報提供することや、多職種連携における仲介役としての機能などについて学んでいた。

6) 【看護管理者の役割】

このカテゴリーは、＜スタッフの働きやすい環境づくりや安全管理＞、＜看護の質の維持・向上に向けた対策の実施＞で構成された。ス

タッフの働きやすい環境づくりや看護の対象者への質の高い看護を提供するための看護管理者の役割について学んでいた。

表4 学んだこと

カテゴリ	サブカテゴリ	代表的なコード
優先順位を 考える際の 実践的な学 び	緊急性や重症度など生命の安全を最優先にした対応	・生命の安全を最優先として緊急性と重症度などの要素も含めつつ、状況に応じて常に組みなおす必要がある。
	その日の予定や指定されたスケジュールの優先	・点滴や処置、検査や入浴など時間が指定されているスケジュールは優先度が高くなり、優先度は患者の状態のみでは決まらないことを学んだ。
	直近の情報や直接的な観察から状態把握	・患者の状態の変化に対応するには直近の情報収集と、実際にコミュニケーションを取り状態把握することで優先度が明確にできることを学んだ。
	効率的な時間管理の必要性	・時間管理を行うには、次に行う行動は何かを意識し常に調整し続けること。そのため、事前準備と自分の行動を念頭に入れて実施する。
	状況変化に応じた臨機応変な判断 判断の根拠の明確化	・患者の病態や症状の程度、自分の勤務時間外の状態、日内変動のある患者の傾向などを把握し、患者の変化に臨機応変に判断する。 ・優先順位の判断には根拠があり、看護の視点で考えて行く必要がある。
専門的知識 や技術に基 づいた対象 理解	対象理解と個別性への配慮	・どのような疾患か、症状があるか、どこかの危険があるかなど様々な情報を把握することで患者を理解し、個々の安全に配慮した援助を行うことができる。
	思いを読み取れるコミュニケーション技術の重要性	・コミュニケーションが難しい患者に対して、積極的に関わることで思いは声かけや行動によって相手に伝わることや、言葉でなくても相手の些細な行動を読み取ることの大切さを学んだ。
	言動の背景にある意味を考える	・対象者の言動や大切にしているものがどのような意味があるのかということを考えて関わるのが大切である。
チームナ ーシングの 実践的な学 び	ケアの実施に必要なスタッフ 同士の協力体制	・わからないことや困ったことがあればチームメンバーや他のスタッフへの相談や、頼ることもチームアプローチであることを学んだ。
	スタッフ間の情報共有による ケアの統一化	・看護師は、申し送りや昼のカンファレンスで、患者の状態変動やADLの変更などを申し送り、情報共有しケアの統一化を図っている。
	チームとして機能するための 責任感と相互の補完	・チームメンバーに協力を得る、他のメンバーをサポートする、リーダーへ相談し業務の調整を図ってもらうなどチームアプローチが必要である。
	リーダーが行う全体の状況把 握と業務の円滑な推進	・リーダーは全体の状況を把握し、同職種や他職種とのコミュニケーションをとりながら日々の業務が円滑に進むよう行動していた。
多職種チ ームの専門 性を活かした ケアの提供	共通の目標に向かって包括的 でよりよいケアの提供	・共通の目標に向かって専門性を互いに発揮しながら協働し、情報共有で補いながら支援している。ケースカンファレンスなどを通じて定期的に集まり患者のこれからの方向性を決めるだけでなく、日々多職種でコミュニケーションをとり、ADL拡大に向けて話し合っている。
	専門的・多角的な対象理解で 希望に沿う生活の実現	・多職種カンファレンスに参加し、患者の希望をもとに多職種と連携し専門的で多角的な視点から考えることが重要であり、退院後の生活をイメージしていか
	地域との連携で目標の共有と ケアの統一化	・地域包括ケア病棟で、地域で働く職種との連携が必要不可欠であり、カンファレンスで情報交換し、目標の共有化や看護ケアの統一化などが重要。
	療養生活の彩りを目指す連携	・多職種チームで患者が最期まで生活に彩りを持ってもらえるように楽しいかわりを行う事もチームアプローチの1つである。
多職種連 携におけ る看護 の役割	対象者の疾病や生活に関する 情報提供	・多職種チームの中での看護師の役割として、患者の疾病に関する情報とともに意向・思いなど様々な情報を提供する必要がある。
	連携・協働するための仲介役	・多職種における看護の役割は、他職種と連携・協働して、患者のADLの回復や全身状態の把握、他職種と共有する専門職種間の仲介役などがある。
看護管理 者の役割	スタッフの働きやすい環境づ くりや安全管理	・管理者が中心となってスタッフの働きやすさや安全管理を徹底することは、患者の安全を守り、質の高い看護提供につながる事がわかった。
	看護の質の維持・向上に向け た対策の実施	・人や物、時間等の資源を工夫して使うことで看護の質を向上させている。

3. 今後の自己の課題

「今後の自己の課題」を分析したところ、52のコードが見出され、11のサブカテゴリ、4つのカテゴリが抽出された。これらのカテゴリ、サブカテゴリ、代表的なコードを表5に示した。カテゴリは、【状態を的確に把握する力】、【地域での生活を見据えた看護】、【対象理解と個別性を尊重した看護】、【チームメンバーとしての力】であった。カテゴリ別に紹介する。

1) 【状態を的確に把握する力】

このカテゴリは、〈重要な情報や変化を収集する力〉、〈疾患や表れている症状の的確な判断力〉、〈専門的知識や技術を身に付ける〉、〈対象者の全体像の把握〉で構成された。このカテゴリはコード数が最も多く、優先順位の判断に関係した記述で占められていた。内容は、表5の代表的なコードにあるように、優先順位を考える実習体験を通して、情報収集力、その情報を的確に判断する力、知識や技術など根拠に基づいた対象者の全体像を把握することといった課題を挙げていた。

2) 【地域での生活を見据えた看護】

このカテゴリは、〈退院後の生活を見据えた看護〉と〈医療と生活の両側面から支える看護〉という2つのサブカテゴリで構成されていた。代表的なコードでは、退院後の生活まで責任を持ち安全安楽に暮らしていけるための継続看護の視点や、医療と生活の両側面から支える専門性を基盤とした看護を課題としていた。

3) 【対象理解と個別性を尊重した看護】

このカテゴリは、〈疾病や症状、状態などの個別性に配慮した看護〉、〈対象者の思いを汲み取った看護〉の2つのサブカテゴリで構成された。患者を理解し、個別性を尊重した看護をするために、対象者の疾病や症状とともに、思いを汲み取る技術を課題として挙げていた。

4) 【チームメンバーとしての力】

このカテゴリは、〈報告・連絡・相談ができる力〉、〈チームで自分の考えを述べる力〉、〈他職種の専門性の理解〉の3つのサブカテゴリで構成されていた。学生は、看護のチームアプローチだけでなく、多職種間のチームアプローチをも体験でき、情報共有や相談の重要性、自分の考えを述べる力の必要性、互いの職種の理解の必要性などを課題として挙げていた。

表5 自己の課題

カテゴリ	サブカテゴリ	代表的なコード
状態を的確に把握する力	重要な情報や変化を収集する力	・優先順位を考えるために、患者の重要な情報や変化を直接的な患者との関わりの中でしっかり収集していきたい。
	疾患や表れている症状の的確な判断力	・優先順位を決定できるようになるために、患者の疾患や今現れている症状を的確に判断し、自信をもってケアができる看護師になれるよう学習に励んでいきたい。
	専門的な知識や技術を身に付ける	・優先順位の判断やアセスメント、看護援助を行う上で、病気や解剖の知識が不足しているため身に付けていきたい。
	対象者の全体像の把握	・優先順位を考えて、その理由や根拠を明確にできるように患者の全体像を把握することが課題。
地域での生活を見据えた看護	退院後の生活を見据えた看護	・退院後の生活まで責任を持ち、その人の生活をイメージして、いかに安全・安心に暮らしていけるかを考えながら長期的に支援していける看護師になりたい。
	医療と生活の両側面から支える看護	・看護師として医療と生活の両側面から支える専門性を発揮し、様々な視点から患者の全体像を捉えて、より良い看護とは何かを追究できるようになりたい。
対象理解と個別性を尊重した看護	疾病や症状、状態などの個別性に配慮した看護	・一人ひとり疾病や症状、状態が違うため、個別性のあるケアを行っていきたい。
	対象者の思いを汲み取った看護	・患者の思いを汲み取り援助できる看護師になりたい。
チームメンバーとしての力	報告・連絡・相談ができる力	・判断に迷った際、自分で解決しようとするインシデントにつながる可能性があるため、判断に迷った場合は報告・連絡・相談を行う事が課題である。
	チームで自分の考えを述べる力	・1人で抱え込まずにチーム全体で解決していくことの大切さを学んだため、自分の考えを相手に伝えることやコミュニケーション能力を養うことが課題。
	他職種の専門性の理解	・対象者に必要なことを共通理解し、根拠に基づいた優先順位を考えられるために、他職種の専門性を理解していきたい。

VI. 統合実践実習の教育的意義

実習での学び【多職種チームの専門性を活かしたケアの提供】のく地域との連携で目標の共有とケアの統一化の代表的なコードには、“地域包括ケア病棟で、地域で働く職種との連携が必要不可欠であり、カンファレンスで情報交換し、目標の共有化や看護ケアの統一化などが重要”であると記されている。また、今後の自己の課題では、入院中から退院後の生活を見据えた看護のく医療と生活の両側面から支える看護が挙がっており、【地域の生活を見据えた看護】の視点の重要性を認識できていることがわかる。このように、多職種カンファレンスや退院支援カンファレンスへの参加が、机上での学びを体験的理解に発展させる貴重な体験となっていることがわかる。また、三谷ら(2020)の研究では、看護教員が認識する統合実習の意義として、就業後の看護職としての将来像を具体的に描けるようになることや、目指す看護師像やキャリアの方向性が明確になるなど、キャリア教育の一端を担う可能性について言及している。表5の【地域での生活を見据えた看護】のく退院後の生活を見据えた看護の代表的なコード“退院後の生活まで責任を持ち、その人の生活をイメージして、いかに安全・安心に暮らしていけるかを考えながら、長期的に支援していける看護師になりたい”のく医療と生活の両側面から支える看護の代表的なコード“看護師として医療と生活の両側面から支える専門性を発揮し、様々な視点から患者の全体像を捉えて、より良い看護とは何かを追究できるようになりたい”は、まさに看護師像のキャリアの方向性を示しており、それを裏付けたものといえる。

VII. まとめ

統合実践実習は、COVID-19による影響があるなかで、初回の実習ということもあり、様々な面で試行錯誤しながら実施に踏み切った感がある。実習病院の協力によって学生全員が臨地に出て実施することができ、実習成果であるレポートの「実習での学び」と「今後の自己の課題」の内容から、実習目的、実習目標は達成できたものと考えられる。

今後の課題として、現在、医療と生活の両側面から支える継続看護や、地域包括ケアシステムが推進されており、多職種チームの中で専門性を発揮していくことが求められていることから、病院はもとより訪問看護ステーションや福祉施設など、様々な場での様々な形の看護を前提とした教育内容を組み入れていく必要がある。また、実習目標1)において自己の学習課題を見出すことに苦労する学生がいたことから、基礎実習から領域別実習へと、実習ごとに自己の課題の意識化と積み重ねを推進していくことが望まれる。さらに、レポート結果から得た知見などは、1年次からの講義や演習の授業方略の参考にしていきたいものである。

COVID-19の感染が拡大する中で、本実習を受け入れ、丁寧に指導して下さった実習病院の皆様、並びに実習受け入れを承諾して下さり、その期間予定に組み入れて下さっていた機関の皆様から心から感謝を申し上げます。

文献

三谷理恵, 關戸恵子, 澁谷幸, 他(2020).

統合実習に対する看護教員の認識と運営実態—教育課程別の比較—. 神戸市看護大学紀要 24 巻. 41-50.